

# 私の研究生活の恩人 —— 三人の教授たち ——

## Three Professors who guided me in my research life

松 永 美 弘

Yoshihiro Matsunaga

〔キーワード：山田鋭夫、小野桂之介、野口祐〕

### はじめに

私は、2014年に『新・実学の学び—現実感覚のマネジメント—』を、2017年に『新・実学への道—人生の応援歌—』を公刊しました。

気がつけば、高齢者の仲間入り、そんな私は前を向いて歩いているつもりでも、やはり後を振り返って思い出すことが多くなりました。たとえて言うなら、ちょうどボートをこいでいるとき、進行方向は後にあっても見ている景色はどんどん視界から遠くになっていくものです。けれども、過去に必死でオールをこいで沈みかけたボートを立て直した時期というのは、強烈に私の脳裏に焼きついています。

現在、高崎商科大学の教員として多くの年若い学生に接していると、半世紀前の私の学生の頃がよみがえってくるのです。当時の私は血気盛んで、スポーツに勉学にと、興味の向くところ、あれもこれもと手を出していました。もちろん、失敗も多くあり、今思い出しても恥ずかしくなるのですが、若気の至りであり気にも留めず、どんどん前へと進んでいたように記憶しています。そんな私が、その後、人生の節目、節目に、三人の師に出会い貴重な導きを得たことで、今現在の私に辿りつけたことを、感慨深く思い出しています。

一人目は、大学時代に出会い今でも勉強面でお付き合いいただいている山田鋭夫先生です。二人目は、慶應義塾大学ビジネススクール時代、修士論文研究の指導教授としてお世話になった小野桂之介先生です。三人目は、慶應義塾大学大学院商学研究科博士後期課程時代の御大・野口祐先生です。当時から先生は御大（おんたい）と呼ばせていただいていた先生は

2016年に他界されたのですが、先生から受けた恩は大きく、決して忘れてはならないと強く思っています。

以上の三名の良き師との出会いがあればこそ私の人生なのです。私はとても恵まれた幸せな人間だとつくづく思います。ここに、忘れられない先生方とのエピソードを交えてエッセイとして書き残すことにしました。

私のボートはゆっくり、ゆっくりと前進していますが、オールをこぐ力は寄る年波には勝てず弱くなっています。それでも、力のある限りオールをこぎ続けたい、前進したいというのが私の今の心境です。

### 1. 山田鋭夫先生と私

#### — 学問の世界に誘ってくれた先生 —

2018年6月のこと、久しぶりに名古屋の先生のご自宅に電話したところ、「いやー、松永君、ありがたいことに、仕事が結構ありましてね」とのお返事。70歳で定年退職され、現在は76歳になられたのでしょうか。先生の旺盛な勉強ぶりと研究者としての姿勢に、私もこの素晴らしい師を見習っていかなくてはと、襟を正した次第です。

山田鋭夫先生は、私が滋賀大学経済学部に入學した年の10月、プレゼミで初めてお会いし、以来長きにわたりお世話になっている先生です。先生は、名古屋大学経済学部を卒業後、同大学の修士課程、博士課程を経て、助手として2年間研鑽を積まれ、29歳で滋賀大学に赴任されました。

プレゼミは、内田義彦の『社会認識の歩み』（岩波新書）をテキストにして少人数で始まりました。社会科学の勉強に興味を持ち始めた学生達に、先生はわかりやすく丁寧に話をされ、決して偉ぶることなく、一

人ひとりの学生を大切にしてくれました。私も、先生に大きく影響を受けて、紹介していただいた本を購買部で注文し、次から次へと読んでいきました。

後になり気づいたことですが、私は紹介された本を何冊も読んでいたのですが、同じ本を何度も繰り返し読むことなく、読みっぱなしだったのです。立ち止まって深く考えることなく、ただ本を買っては読むことだけに終始していたのです。それで、先生から逆に質問されると答えられないという、恥ずかしい体験を何度もしていました。

先生が赴任した翌年、評判を聞いた新入生が15人くらい先生のプレゼミに加わりました。その頃から、先生の滋賀大学での活躍が始まりました。一方では、先生を囲んで『資本論』の勉強会を有志により立ち上げていました。もちろん私も参加し、先生に紹介された本や雑誌を読み、マルクス関係の知識を吸収していきました。マルクス経済学には、マルクスの著書『資本論』(全3巻)があるのですが、本の分量がとてつもなく多く、しかも難解であり、私は卒業までに2巻しか読めませんでした。

ここで少し言い訳になるのですが、私は大学1年から水泳部に入部し、春と夏はプールづけで体力を消耗し、2年の秋からはキャプテンとしての務めがあり、3年の夏の終わりまで部活動をしていました。そんなこともあって、集中して本を読んで勉強することができなかつたのです。それでも、プールは屋外にあり、秋と冬は泳ぐことができなかつたことが幸いして、半年間は勉強に集中することができました。

先生は、名古屋から彦根まで週2日通っておられました。当時、先生の授業は大変人気がありました。その理由の一つはまず先生のお人柄でした。学生に対して優しく丁寧な接し方をされたことが好感を持たれていました。それに加えて学問的にも実力があり、先生の周りにはいつも学生が集まっていたのです。教室でも研究室でも同じでした。先生には人をひきつける魅力があったのです。私は先生が大学から彦根駅まで歩いて帰られるとき、いつも横について、話をしながら歩くのが楽しみでした。先生にとっては迷惑だったかもしれませんが。私は、その頃から、相手の気持ちを忖度するということができず、自分がやりたいと思うことはやるという性格だったのです。

先生は、滋賀大学に約10年間在籍された後、大阪市立大学経済学部で転勤されました。その後、先生が名

古屋大学に転勤される時、奇しくも、私も同じ愛知県にある岡崎女子短期大学に助教授として辞令をいただき、赴任することが決まっていました。私は6年間、慶應義塾大学の大学院で学び修士課程を修了、博士課程を満期退学し、初めて教師としての職を得て、希望と期待に胸を膨らませていた時でした。岡崎から車で東名高速を40分ほど走らせて名古屋大学に行くことができます。私は先生を何度も訪ねて行ったものでした。先生は、私の話をよく聞いて、まじめに答えて下さいました。先生が名古屋にいてくださったお陰で、相談にも乗っていただき、私の大学教員生活を支えていただいていたと感謝しています。

私は、11年間愛知県岡崎市に住み、2001年、高崎商科大学に転勤し、現在に至っています。ある時、先生から高崎経済大学で学会があるからと連絡をいただき、高崎駅でお会いしたことがありました。先生は今や、国際的にも有名な方ですが、自慢話は一度も聞いたことがありません。そして人の悪口を口にされたこともないのです。

いつの日だったか、先生がご自分の本を見せてくれました。何十回も繰り返して読んだという本でした。その時、私は自分を恥じるとともに、深く学ぶとはこういうことなのだと教えられたのです。それまで、私は読書しても浅く広く読みっぱなしでできたのでした。今、学生に対して、反省も込めて、何度も繰り返し読むことを薦めています。私は改めて、素晴らしい師に出会えたこと、そして、先生が私を「弟子」の一人として認めて下さったことに深く感謝しています。

先生は名古屋大学を定年退職された後、九州産業大学に移られ、70歳まで勤められました。先生は研究者として、生涯現役を貫いておられます。先日も、本を出版したからと分厚い研究書が送られてきました。私は心から先生を尊敬しています。2年前の夏、最愛の奥様を亡くされ、大きな悲しみの時もありましたが、先生の学問への研究心は衰えることはなく、今も健在であることを確信しています。

山田鋭夫先生は、私を学問の世界に誘ってくれた偉大な先生であり、恩師なのです。

#### 山田鋭夫先生のプロフィール

1942年生。名古屋大学大学院経済学研究科博士課程満期退学。滋賀大学経済学部助教授、大阪市立大学経済学部教授、名古屋大学経済学部教授、九州産業大学経

経済学教授を経て、名古屋大学名誉教授。専門は理論経済学・現代資本主義論。経済学博士。著書に『さまざまな資本主義』（藤原書店）、『市民社会と民主主義—レギュレーション・アプローチから—』（共著、藤原書店）、Contemporary Capitalism and Civil Society (Springer) など多数。

## 2. 小野桂之介先生と私 —KBS時代の恩人—

慶應義塾大学ビジネススクール (KBS) の2年間で、いかに辛く、苦しい日々であったかを何度も文章にしてきましたが、その時代に修士論文指導教授として、私を支え、導き続けてくれたのが、小野桂之介先生だったのです。

私は、アカデミックな勉強ができるものと大きな勘違いをしてKBSに入学したので、スタートから失敗の連続で、苦戦していました。入学式の翌日、軽井沢に向かう電車の中で、初めて声をかけられたのも小野先生でした。私は避暑地で有名な軽井沢での合宿はレクリエーション半分、勉強半分ぐらいの軽い気持ちでいたのです。先生から、「あんた、えらく落ち着いているけど軽井沢に行ったら大変だよ」と脅されても、その言葉の意味すらわからなかったのです。軽井沢での失敗談は何度も書いてきましたが、小野先生はその時から、私の言動やら、態度などすべてをひっくり返して、これからの2年間の苦労を見透かしていたのではないのでしょうか。先生は落ちこぼれそうになっている私を、まさに拾い上げてくれた救いの神（少々オーバーな表現ですが）といっても過言ではないのです。

小野先生は、KBSで「生産政策」という科目を担当されていました。午前の授業を終えてから時々工場見学があり、大同特殊鋼やブリジストンタイヤ（立川工場）など、電車を利用して行きましたので先生とも親しくお話をする機会がありました。2年次の専門ゼミの選抜では、小野先生の研究室に申し込んで、何とか入れていただきました。

先生の面倒見の良さは本物なのです。2年目の春から修士論文を書き始めるのですが、私の文章は余りにも稚拙で、そのまま提出できるものではなかったのです。毎日少しずつ書いては先生に見ていただき、赤ペンで修正ののち、それをワープロに打ち込んでいくという作業を繰り返しました。先生は、私の原稿を自宅

に持ち帰っては、夜中の3時、4時までしっかりと文章を手直ししてくださいました。翌日研究室に行くと、先生は「夜中の3時までかかったよ」と言いながらも、嫌な顔一つせず、私に指導し続けてくれたのでした。私は申し訳ない気持ちいっぱい、いつも頭が下がる思いだったのです。そして、12月の終わりまで論文作成があり、やっと仕上げることができました。現在私は教師として学生の論文を見る機会も多く、小野先生が私にしてくださった指導を思い出し、一人ひとりの学生を大切にしていこうと自身を戒めています。

私は、KBSで学びながらも、慶應義塾大学大学院商学研究科博士後期課程に進学したい旨、先生に相談しました。その時も、願書とともに提出する研究概要書の作成を、先生は時間をかけて手伝ってくれたのでした。私は受験科目のドイツ語に力を入れていましたが、小野先生の大きな助力なくしては合格できなかったと、振り返り感謝の思いを強くしています。KBSで落ちこぼれの学生だった私が、博士後期課程合格というニュースは誰もが信じられないというほどの驚きだったのです。小野先生も、初めは「本当かい」とびっくりしたようでしたが、すぐに共に喜んでくれたのです。

KBSの2年間を無事に終えることができましたが、私にとって長かったこの2年間は小野先生なくして語ることはできないのです。そして、念願の慶應義塾大学大学院商学研究科博士後期課程に進学して、自分の希望する分野の勉強ができることに大きな喜びをいただくことができたのです。私は、ここで4年間勉強し、1991年愛知県の岡崎女子短期大学に助教授として採用され、赴任したのでした。

小野先生は、KBSを64歳で退職され、2005年に愛知県春日井市にある中部大学に経営情報学部長・大学院研究科科長として移られ、新しい教育への道を踏み出されました。私は2001年に高崎商科大学に赴任するため、愛知から群馬県の高崎に引っ越しましたので、少し残念な気持ちもありました。けれども、先生はKBSにおられた、1991年ごろから「楽道クラブ」と称して、年2、3回ゼミ修了生との勉強会及び懇親会を東京で開催してくださっていました。午後6時から始まり、1時間のプレゼンテーションがあり、それを受けての議論、その後懇親会という流れですが、今では中部大学で先生から教を受けた人たちも集ってきています。先生の人望の厚さは、会に参加する度いつも

感心しています。「楽道クラブ」が毎回盛況なのは、内容が充実していることと、先生の人望によるものではないでしょうか。

現在、先生は中部大学を退職されて、横浜のご自宅に戻られています。先生は多趣味の方で、俳句を昔から続けておられ、先日ご自分の句集を出版され、私も一冊いただきました。その他、三味線と都々逸という、日本の芸能も嗜んでいらっしゃいます。人間的にも幅が広く、趣味を楽しみながらも、色々な会社等の社外役員も引き受けられていると伺っています。先生の人脈や交際範囲の広さは、やはり人に信頼され、人望のある素晴らしい先生だからこそと思います。

私は、KBS以来、先生には私の書いた拙い文章を折あるごとに見ていただき、修正していただいています。私はどこまでも、不肖の教え子なのです。

先生は、研究成果の一つとして『ミッション経営のすすめ』という本を出版されています。ミッション経営とは、経営者も従業員も共に使命感を共有して経営するという趣旨の考え方で、こうした利益追求だけではない経営方針は現在徐々に広まりつつあります。このミッション経営の提唱者が小野先生なのです。先生は、KBS時代のケース・メソッドの授業も、学生指導も素晴らしい方で、学生とも信頼関係がしっかりとできていました。私は、小野先生への感謝を忘れることなく、これからも私の人生を生き貫いていかなくてはならないと、自分自身を励ましています。

### 小野桂之介先生のプロフィール

1940年生。慶應義塾大学工学部管理工学科卒業。同大学院工学研究科博士課程終了。工学博士。慶應義塾大学大学院経営管理研究科助教授、同教授、中部大学・大学院教授、同副学長を経て、慶應義塾大学名誉教授、中部大学名誉教授。著書に『ミッション経営の時代』（東洋経済新報社）、『ミッション経営のすすめ』（東洋経済新報社）、『CSR入門』（日本規格協会）など多数。

## 3. 御大（おんたい）、野口祐先生

### —生涯、前向きの学会リーダー—

野口祐先生は、2016年5月7日、満88歳で永眠されました。先生は、数多くの業績を残され、教育者としても、研究者としても偉大すぎて、私が語るには恐れ多い方なのです。

初めて野口先生にお会いしたのは、私が慶應義塾大学ビジネススクール（KBS）の2年生の時でした。三田にある商学研究科との単位互換制度により、修士課程の野口ゼミに入れていただくことになりました。私自身も、とても忙しい時期で、KBSの授業とケース・メソッドの予習、修士論文の作成、夜は博士後期課程受験の準備でドイツ語の学校と、目一杯のスケジュールをこなしていかななくてはならず、無我夢中で過ごしたKBSの2年目でした。

幸い博士後期課程に合格し、念願だった大学院商学研究科博士課程で野口先生の門下生となることができたのでした。修士1年と博士後期3年と浪人1年を合わせて5年間、野口先生の指導院生として学ばせていただきました。先生は、多くの学会を新しく立ち上げられ、常にリーダーとして活躍され、世界的にも有名な研究者だったのです。もちろん、語学も堪能で、英語でレクチャーされたこともありました。先生の業績は膨大で、教育者としてもゼミ門下生を多く育てられ、彼らの多くが各大学の教授となり、どんどん裾野を広げていっているなど語り尽くせないほど偉大な先生なのです。

私には忘れられない先生との思い出があります。私は、博士後期課程の翌年に、大学教員採用の公募にいくつも願書を出していました。ある大学に採用がほぼ決まりかけていたのですが、最終段階で落とされました。大変ショックでした。先生は、「君の能力に問題はないのだ。君に合った学校を選べばいいのだ。そして、もっと良い学校に行けばいいじゃないか。それだけのことだよ」と、さらりと問題解決の方向性をアドバイスして下さったのでした。先生は常に前向きでした。「満足するな。満足したら、もう駄目なのだ」と、いつも学生たちに向けて語っておられました。その後も、私はいくつもの大学、短期大学に願書を出しましたが、なかなか採用決定には辿りつけませんでした。今、学生達が就職活動で数々の会社を受けて、不採用の通知を受け取っている話を聞くにつけ、「諦めてはいけないよ。君に合った仕事がきっとあるはずだよ」と、励ましてやりたい心境です。

私は、野口先生の言葉に励まされ、半年後、公募で採用された愛知県の岡崎女子短期大学の助教授として赴任することができました。その後、学会などで野口先生にお会いする度に、「君を何とか短期大学から4年制の大学に行かせてやりたいのだ」と、気にかけて続



けてくださいました。そして11年後、現在の高崎商科大学に教授として赴任することになったのでした。

野口先生は、学究生活50年の偉業を果たされましたが、先生は人間的にも素晴らしく、人に優しく、ご自分に厳しい方でした。ある時、野口ゼミ門下生の友人達と先生を訪ねて行ったことがありました。その時、先生は80歳を過ぎておられました。帰り際のこと、その場を辞そうと大きな体の私がゆっくり、ゆっくりと椅子から立ち上がろうとした時、先生はサッと手を差しのべて下さったのでした。先生の優しさ、気取らない振り舞いを見せていただき、大変感動したものでした。その光景を思い出すにつけ、何事も気付きとともに身軽に動かれていた現役時代の先生のお姿を偲ばずにはおられません、先生はいつも多くのお仕事を抱えておられました。「私は忙しいのだ」と言いながらも、決して手を抜かず、どんどん仕事をこなされていました。

ここまで、野口先生とのエピソードを交えて書かせていただきましたが、最初にしたように先生は偉大な方ですので、このような駄文を書いて失礼ではなかったと気がかりです。けれども、野口先生は私の人生を大きく変えて下さった大切な先生です。今は亡き御大、野口祐先生には感謝しかありません。

### 野口祐先生のプロフィール

1926年生。慶應義塾大学経済学部卒業と共に同大学旧制大学院進学、慶應義塾大学商学部教授。慶應義塾大学経済学博士。ベルリン自由大学客員教授、パリ大学招待教授、日本大学商学部教授、創価大学教授、日仏経営学会創設・同学会会長、日本経営学会理事長、アジア経営学会創設・会長就任、東アジア経営学会国際連合創設・会長就任、中東・中央アジア諸国経営経済学会国際連合設立・会長就任、慶應義塾大学名誉教授。著書に、『経営管理論史』（森山書店）、『統合的多国籍企業論』（森山書店）、『ソフトウェアの経営学』（森山書店）など単著17冊、共著・編著36冊、論文多数。2016年ご逝去。

